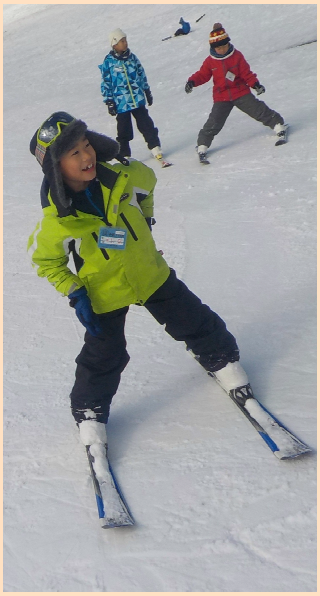
冬休みプログラム2

おもいっきりスキーチャレンジ!

全国的に雪不足。出発前、人工雪であること、そんな中でも楽しみをみつけて行こう!と話しておりましたが、あまりの雪の少なさにびっくり。細い人工雪のルートを滑ることの難しさ。明日もなのかと思うと、子どもたちの心もざわざわ。夜、窓をたたく大粒のあられ。これが雪になってくれたら・・・。翌朝、子どもよりも先に、スキー場の下見に。真っ白な雪。スキー場を変更して、2日目スタート。子どもたちも大喜び。神様に感謝して、スキー開始。リフトは2本しか動いていないけれど、昨日のことを思えば、天国のよう。一本一本、大切に滑ります。圧雪機で圧雪するほどの雪ではないため、ふかふかの雪が残ります。重心を低くして～。頭を上げて～。そうしないと、雪の斜面に跳ね返されてしまいます。細いすり鉢状になったゲレンデを。ボードのお兄さん達に、すみません!と頭を下げて、右に左にいったりきたり。あら不思議、上の学年の子どもたちは、スキーに攻めの姿勢が加わって、スキーが二の字に!、スキーで冬の山のどこへでもいけるようになることは、子どもの心を大きく広げ、そして大きく揺らすのでした。



▲ ここができていない、ではなく、できてきている、できてきているという視点を大人が持ってあげることで、子どもたちの中にある自分を肯定する感情や、自分を尊ぶ感情、視点が生まれてきます。スキーなどは心技一体なので、それがあれば、おのずと上達。自分の日常にも、そんな視点を、反映してほしいと想うのです。

▲リトルコース6「なぞ?なぞ?トリップ!」　右上：冬休みプロジェクト「スノー&犬ぞりチャレンジ!」

右下：キッズコース6「チャレンジハイク! ～15km～」

ようやく寒くなってきました。みなさま、お体、どうぞご自愛下さい。

Adventure Kids School

子どものための自然体験学校「アドベンチャーキッズスクール」活動報告レポート

Report "adven Dekita?! " －アドベンデキタ？！－

adven Dekita

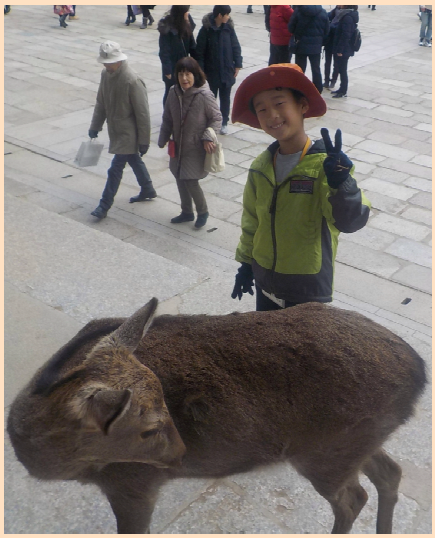
冬休みプロジェクト１　「スノー＆犬ぞりチャレンジ！」

2020.Jan

プログラムの活動報告

リトルコース6　「なぞ?なぞ?トリップ」(年長、小1)

意地悪スタッフからのなぞなぞを解き明かし、なぞのゴールを目指しての、子ども達の一日旅。ゴールは、奈良の東大寺南大門。今回の旅は、年長さんも、切符を買います。改札も、自分で切符を通して通ります。普段は大人にしてもらうことを、自分達でやっていることに、ワクワクとした高揚感を感じながら、旅はどんどん続きます。自分の知っている日常の世界から、仲間が一緒にいるとは言っても、知らない土地へ自分達できていること、そしてその土地で次なるなぞなぞを探していること、そこで見えている景色はどんなだろうと想像すると、小さな心は、大きく揺れ動いていたことだろうと想像できます。無事ゴールした子ども達は、なんだか一回り大きくなったような感じがしました。



▲前回の山のぼり、今回の一日旅を経て、子ども達は、自分達で挑戦してみることの楽しさを感じはじめているように思います。その楽しさに気づくと、大人に頼ることや、大人の助けを得て、近道をして結果をえることよりも、寄り道回り道があっても、長い時間がかかっても、自分達でやりきることを楽しむようになっていきます。小さなはじめの第一歩。始まりました。

キッズコース6　「チャレンジハイク!」~15km~(小2~)

「15 キロ歩くよ。しんどいよ、足も痛くなると思うよ。いけるかな~」そう話しながら、準備を行い、ハイクスタート。淀川沿いの直線コースについた途端、後は八幡までひたすらまっすぐだから、頑張って」とスタッフ一同、大きく離れます。最初はちらちら、心配そうにスタッフのほうを見ておりましたが、何度見ても、何の反応もないスタッフに(あえてそうしてます・・・。)気持ち切り替えて、歩き始めると、早い早い。ものすごいスピードです。丁度中間地点が京阪くずは駅周辺。本日2回目の休憩。早いペースとは裏腹に、なんだか子ども達の様子がぎくしゃくしています。どうも、早く行きたいメンバーと、いろいろと寄り道をしてみたいメンバー。お互いにお互いの想いを伝え合う事ができずに不満が募っている様子。先頭を行く人も、真ん中を行く人も、後ろを行く人も、それぞれがそれぞれに、自分の想いを伝える。そしてそれを受け止める。そうしていかないと、全員でゴールはできないかもしれないねと伝えます。そこから子ども達の様子は変わります。寄り道もしながら、でもほどよいペースで。それがうまくいったとき、なんだか自分達いけてるなと思うのです。最後は、残り1 5キロ、1時間。はてさて、ゴールできるのか! 足は痛い、でも諦める気持ちは、顔に出さないキッズの子ども達。最後は、根性で歩ききり、7時間で、15キロ完歩したのでした。

大人でも、15キロという距離を歩くことは、なかなかありません。
最初は15キロという距離が想像できませんでした。でも、ゴールした後は、その距離も、その距離をあるくことも、想像ではなく、わかります。
そして、歩ききったあとの、気持ちも、自分自身の経験から知っています。

ジュニアコース6　「グループビバーク!」(小3~)

「もう、あかんわー、あきらめて、ほんまの野宿しよう・・・」と女子チーム。今回は1泊2日で、自分たちでテントのかわりになるものを手作りして、本当に外で泊まり生活する24時間「グループビバーク」。どのチームも、頭に思い描いた通りにはいかない。その時、「いかにやるか?」で工夫し進んでいくことが大事。しかし、件の女子チーム。真っ暗になっても泊まるものができず、資材不足も発覚!寒さも手伝って「あきらめよー」。しかし、「いや、可能性あるんやったら絶対いやや、あきらめへんわー」と数人のメンバー。大きさを縮小し、テント代わりの家が自立するようにしたり、足りない資材(壁)の代替えになるものをと、テントマットを使ったり、固定概念にとらわれず、できないではなくいかにやるか!周囲のメンバーも気持ちを持ち直し、完成した彼女たちの「家」で、一夜を乗り越えた女子チームでした。

▲寝床が完成できるかドキドキしたけれども、眠るとき寒くないかと、不安でたまらなかったけれども、仲間と一緒に、あえて、そのドキドキを楽しんでみれた、乗り越えてみようと挑んでみれた、やり切れた。
そんな、自分をいいなと想ってほしい。そんな、自分の心の力に気づいてほしい。きっと、これから先の人生で、またドキドキすることに出会うはずだから。
夜の気温は、マイナスだったけれども、ニコニコ顔で、朝を迎えた子ども達でした。

チャレンジ隊5　「ロッククライミング!」(小5~)

全員、はなからあきらめる気など更々ない。高さ7m程の天然岩のロッククライミング。チャレンジ隊では、ひとりひとり1日で必ず1つのルートのてっぺんを目指すことを目標に挑戦。天然の岩はもちろん登る用にはつくられていない。手を持つ所、足をかける所、自分で探し出し、ほんの小さな手がかり、足がかりでも、それを使って何とか上へ、少しでも上へと粘る、登る子どもたち。途中、進まず同じ場所で止まってしまうことがあっても、その表情は全くあきらめる気なし!できるはず!と己を奮い立たし挑む。ほんの少し上がれば、さっきまで届かなかった所に手が届き、足が届き、また、新しい景色が、展開が始まり、その新たな展開を楽しむかのような顔。始めからそうではなく、沢山の経験を積み重ねていくことで、そんな場面でも強い心を発揮できるようになった子ども達。そんな挑めている自分を素敵だなと想ってほしいと思っています。

▲たった1ミリでも、1センチでも、上へあがれば、今まで持てなかったところに手が届くこともある。手が届けば、足が届けば、また、次の一手。届かない、難しいと、じっと止まっていれば何もかわらない。自分が動けば、景色は変わる。自分で動いて、景色を変える。これ、まさに人生と同じ。自分の目標に向かって、1ミリでも動こうと挑んだ自分を、いいなと想ってほしいのです。

冬休みプログラム「スノー&犬ぞりチャレンジ!」(小1~)

言葉の通じない犬たちに、気持ちを伝える。今年の犬たちは、走るために訓練されているので、子どもだと、走る前に触ったりすることはできないかもしれないと言われていたのですが、(危険な犬ということではありません。走りたくて気持ちが高ぶっているので、子ども達のほうが怖いと感じるかもしれないということです。)そんな犬たちを前に、どこから、どうしていったら犬たちと仲良くなれるか模索している子ども達。ハーネスをつけさせてもらうこととなり、犬との距離が近づけるチャンス到来、言葉ではなく、子ども達の何とか、自分達のことを知ってほしい、仲良くしてほしいという想いが犬たちに通じたのか、それまで、興奮気味だった犬たちが子ども達の優しい空気に包まれて、ふんわり柔らかになったような気がしました。ただ単に、犬ぞりに乗せてもらうのではなく、犬たちとしっかりと関係を作って、ともに、走る。走り終わった後は、犬たちに声をかけ、体を抱きしめ、ありがとうと伝えます。言葉がなくても伝える事は出来る。人間も動物も同じかもしれません。

▲ マイナス20度の世界、犬ぞり、亜寒帯での山小屋生活。大阪の日常とは全く違う世界。
とまどうのではなく、好奇心を持って、挑めたこと、生活できたこと。そんな自分っていいなと想ってほしい。
未知の世界への、たゆまないあこがれをもって、これからも、進んでほしい、挑んでほしいと想うのです。